

紀行文集成をめぐりて

つちや
土屋 博
ひろし

一「日本名勝吟詠集 天之巻」永松木長編著

(矢島誠進堂、明治二十七年刊、一六二頁)

和綴。題字は公爵近衛篤麿、題詩は文學博士末松謙澄。序文は京都府尋常師範學校漢文教授中村確堂。天の巻は「詩之部」にして、對象地域別に、京都、京都繁昌詩、大阪繁昌詩、東京、東京繁昌詩、東山道、北陸道、山陽道、南海道、西海道より成る。頼山陽の詩として掲載せられたるは、南禅寺、通天橋、遊吉田山、嵐山、鴨河寓居雜詩、桂川所見、浪華舟遊、浪華橋納涼、櫻井驛楠公別子圖、姫路懷古、赤馬關守歲詞、壇浦行、入豊前過耶馬溪遂訪雲華師、高山彦九郎、薩摩など。ちなみに地之巻は「和歌之部、俳句之部」なる由。

二「日本名勝詩選 全五冊」小野湖山先生題辭、行徳玉江先生編輯

(菫山堂、明治三十九年第三版、定價六拾錢)

和綴。一冊目は、五畿内(山城、大和、河内、和泉、攝津)に始まり、冒頭には廣瀨旭莊「京師」、頼山陽「京都」など。五冊目の掉尾を飾るは臺灣。調べてみるに、題辭の湖山先生は梁川星巖の愛弟子なること判明す。

三「名所句集 俳山水」泉鏡花輯

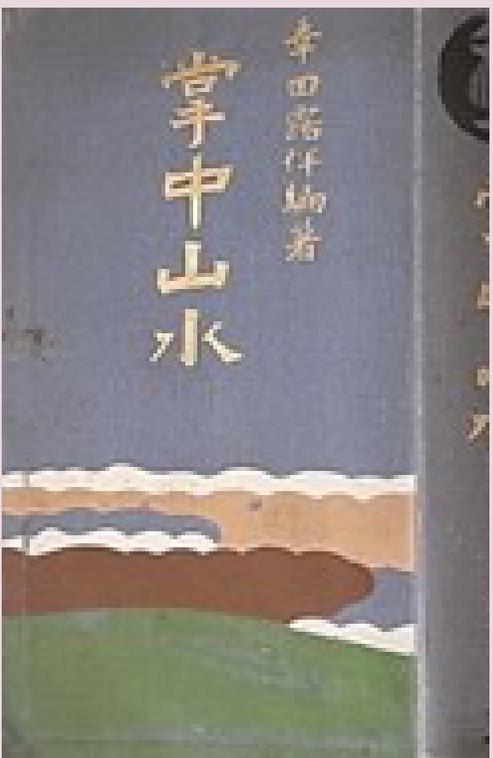
(聚精堂、明治四十四年刊、正價金九拾錢、八〇四頁)

武蔵(「武蔵野は茅屋を花の宿りかな 宗祇」など)、相模(「稻塚の戸塚につゞく田守かな 其角」など)、伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、以下地域別に掲載せらる。

四「掌中山水 乾」幸田露伴編著

(聚精堂、明治四十四年刊。正價金壹圓四拾五錢。一〇二〇頁)

畿内、東海道、東山道の三地域別に、著名なる山水につきての古人の文章を集めたる詞華集なり。冒頭には紀貫之の「都入り」あり。曰く、『家に至りて門に入るに、月明ければいとよくありさま見ゆ。冒聞きしよりも増て云ふ效なくぞ毀れ破れたる。家を預けたりつる人の心も荒れたるなりけり』と。次いで平家物語の「舊都の月」。『舊都に残る人々は伏見廣澤の月を見る。・・・稀に残る家は門前草深くして庭上露繁し。蓬が杣浅茅が原、鳥の臥所と荒れ果て、蟲の聲、恨みつ、黄菊芝蘭の野道とぞなりにける。』



五「掌中山水 坤」幸田露伴編

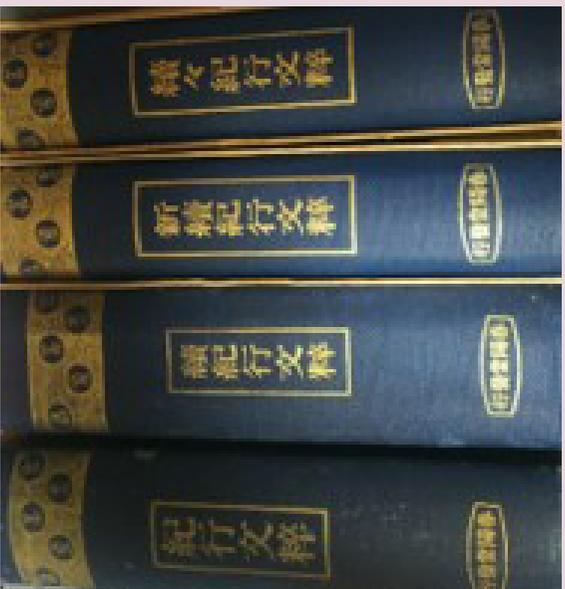
(聚精堂、明治四十四年刊、正價金壹圓參拾錢。本文七九九頁、索引一一〇頁)

本書に収録せらるる地域は、北陸道(貝原益軒の小濱、謡曲の安宅、三島中洲の赤倉二十勝など)、山陰道(伊藤東涯の延年池、太平記の三尾の湊など)、山陽道(帆足萬里の瀬戸内海、平家物語や紫式部の須磨明石など) 北海道(宇津保物語の吹上の濱、齋藤拙堂の熊野那智など)、西海道(頼山陽の耶馬溪、新井白石の霧島嶽など)、北海道(鷺津毅堂の蝦夷の山脈、松浦武四郎の支骨湖など)。

六「漫遊必携 紀行文粹」

(春陽堂、明治四十四年六月四版、本文五七四頁、實價金壹圓)

天金。初版は明治四十三年八月。春陽堂の本シリーズ四冊は、紀行文集成として、幸田露伴の「掌中山水上下巻」、大町桂月の「山水大觀」と並び好著と覺ゆ。本篇は畿内及び東海道東部を収録す。たとへば、浅井了意(一六九一年京都生れ)の「江戸めぐり」より、「赤坂のふもとに溜池あり、そのかみ江戸中の水道の源なり。今はたま川の水道をきり流し、日本橋より南の者これをのむ」と。



七「漫遊必携 續紀行文粹」

(春陽堂、明治四十三年十二月刊、本文六二八頁、實價金壹圓)

天金。駿河、遠江、參河、尾張、伊勢・志摩・伊賀、近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野を収録す。十返舎一九「沼津の驛」より安積良齋「絹川を下る記」まで。たとへば、「長良川鵜飼(岐阜市教育會編岐阜案内抄より)」の冒頭部分は以下の如し。『凡そ、漁撈のわざ世に類多しといへども、斯業の如きは他に其の比を見ず。殊に、往古より傳へて今日に至れるに於てをや。鵜匠等が、世々斯業に力めたりしは、固よりなれども、當時政廳の厚き保護と世人の賞觀の深きによるものなり。宜なる哉、今や、普く世人の膾炙する所となり、頻年、益來觀者の多きに至れり。況んや、金華の山色、藍川の水氣、清涼にして、燈火水に映じ、漁火空を焼き、赤壁の火攻、西湖の夜景もただ雷ならざるに於てをや、之れ實に今日の盛況をいたせし所以なり』と。

八「漫遊必携 續々紀行文粹

(春陽堂、明治四十四年七月刊、本文五八九頁、實價金壹圓)

函入。天金。東山道下、山陰道、北海道を収録す。松尾芭蕉の松島の賦、笹川臨風の平泉懷古、貝原益軒の天の橋立など。

九「漫遊必携 新續紀行文粹」

(春陽堂、明治四十四年十月刊、本文六一〇頁、實價金壹圓)

函入。天金。北陸道、山陽道、西海道を収録す。頼山陽の耶馬溪の奇勝、久保天隨の鹿兒島入り、夏目漱石の阿蘇登山など。

十「山水大觀」大町桂月著(鍾美堂、大正六年刊、定價金貳圓五拾錢)

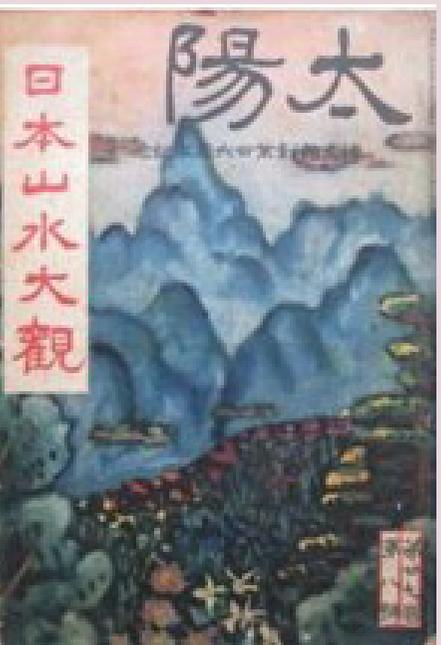
天金。我が国を代表せる古今名家の日本の山水につきての紀行文を地域別に編集したるものなり。著者による取捨選択は漢詩文も含む點、幸田露伴編著の名著「掌中山水」(乾坤)に比し價值高き面さへあり。たとへば、臺灣の箇所を見るに、大久保甲東(利通)の「臺灣龜山陣營に宿す」を取り上ぐ。「大海波鳴つて月營を照す。誰か知らん萬里遠征の情。孤眠未だ結ばず家に還る夢。遙かに聴く中宵喇叭の聲。」



十一「雜誌 太陽 大正十二年六月號」

(博文館、正價金六拾錢、三五二頁)

特集は「日本山水大觀」。博文館創業三十六周年記念號なり。大町桂月は「北海道山水の大觀」及び「鳴子温泉」を執筆す。織り込みの「日本名勝地圖」(穴山義平筆)は貴重なり。



(博文館、昭和五年刊、非売品、八三三頁)

函入。全十二篇のうち、最初の六篇(吾妻路、岐蘇路、西北、南遊、續諸州、和州)は貝原益軒の作。柳田國男解題に曰く、「近世著名なる旅行者の紀行文にて、自分が少年期以來再三讀し、今後も若し出來るならば又讀んで見やうと思ふもの若干を、此一編には輯録することとせり」と。

(令和元年六月二日受附)